

令和 6 年度

**こうめ高齢者支援総合センター・高齢者みまもり相談室
事業計画・報告書**

第9期日常生活圏域別地域包括ケア計画 目指すべき将来像

多世代の力を合わせて、高齢者が生きがいを持って暮らすことができる地域

これまで、高齢者が生きがいを持って生活することができるよう各種事業を推進してきました。令和 4 年度墨田区介護予防・日常生活圏域ニーズ調査において、生きがいがあると回答した高齢者は令和元年度と比較して 13.8% 減少していました。人が生きがいを感じにくくなる要因のひとつとして、孤立があります。こうめ地域における高齢者の独居世帯率は 26.9% となっています。独居世帯の高齢者の孤立を防止するためには、家族内でのコミュニケーションだけでなく、社会的な交流が必要であるといえます。長い期間のコロナの影響や生活スタイルの変化により、社会的なつながりは希薄化しており、今後も社会的な孤立や孤独が増大する可能性があります。高齢者にとって孤立や孤独は健康への影響が大きいと言われています。地域のあらゆる世代が地域でつながり、高齢者の社会的孤立を防ぐことで、高齢者が生きがいを持って暮らすことのできる地域を目指していきます。

人口	高齢者人口	高齢化率	後期高齢者人口	高齢者人口に対する 後期高齢者人口
27,593 人	5,878 人	21.3%	3,389 人	57.7%

令和 7 年 4 月 1 日現在

＜全センター・相談室共通業務＞

1 総合相談支援

6 年度の 取組の視点	課題の解決に向けて丁寧なアセスメントを行う。本人や相談者の課題だけでなく、できることや楽しみ等の強みに焦点を当て、介護保険サービスに限らず、地域の多様な資源を活用した支援につなげる。		
結果	新規相談件数 725 件（前年度 769 件）	継続相談件数 1,407 件（前年度 1,890 件）	
○総合相談では、相談内容を全相談員で共有し、トリアージを行い、適切な担当者を決め、支援方法の妥当性の確認をしながら協働して対応することで、リスク管理および相談員のスキル向上を図っている。			
○令和 6 年度は令和 5 年度と比較して、全体の相談件数が減少しているなか、虐待・権利擁護に関する相談は 319 件と前年度より 15 件増え、全相談件数の約 12% である。うち、虐待の相談件数は 157 件で約半数である。			
○地域密着型サービス運営推進会議への出席 13 回。地域密着型サービス事業所と町会や老人クラブ等の地域住民との関係構築を進め、新たな社会資源の創出など地域包括支援ネットワークの充実を図った。			

2 権利擁護

6 年度の取組の視点	8050 問題や消費者被害、精神疾患等のさまざまな課題が絡んだ相談が増えている。必要な関係機関と連携し、ガイドラインに沿って適切な対応を行う。また、権利擁護についての周知を図るために、地域向けの研修を2回、専門職向けの研修を4回実施する。	
結果	虐待防止ネットワーク（研修、講座等） 4 件 (前年度 5 件)	権利擁護相談（虐待相談含む）件数 72 件（前年度 66 件）
<p>○虐待防止ネットワーク</p> <p>①権利擁護研修会は5回実施し、地域住民向けに1回、専門職向けに4回実施した。地域住民向けの講座内容は成年後見制度の活用について取り扱い、参加いただいた地域住民からは制度活用に関する質問を寄せられた。来年度は講座開催の方法の検討や講座名称を一般の方にもわかりやすくすることで参加者が増加するよう工夫したい。</p> <p>②専門職（介護支援専門員）向けの研修は4回実施し、延べ41名が参加した。毎回事例を通じた勉強会とし、弁護士も参加して実施している。</p> <p>専門職向け研修会では事例検討も行い、事例提供したケアマネと連携して対応することで課題のある世帯への介入へ至った。</p> <p>○権利擁護相談</p> <p>虐待相談件数は令和5年度は、延べ225件だったものが、令和6年度は延べ214件に減少している。新規に虐待受理したケースは令和4年度20件、令和5年度25件とほぼ同程度だったが、継続して対応しているケースが終結した結果、全体としての事例数は、令和5年度末時点では26件だったものが、令和6年度末時点では17件のケースが終結したことにより、取扱件数が12件と減少した。相談内容は、子や配偶者から虐待を受けているケースが多く、その多くに何らかの精神疾患を抱えている事例の他にセルフネグレクトのケースの増加も散見された。引き続き精神科の医療機関、行政等の各種関係機関と連携し対応を行っている。</p>		

3 包括的・継続的ケアマネジメント支援

6 年度の取組の視点	多様な社会資源を活用したケアマネジメントを支援するため、介護保険等に関わる事業だけでなく、さまざまな社会資源の周知を図る。自立支援・重度化防止に資するよう、必要な社会資源の支援や開発にも取り組む。	
結果	ケアマネジャー向け研修 2回（前年度 6回）	事例検討会 1件（前年度 2件）
<p>○ケアマネジャー支援研修</p> <p>「ストレスと精神的不調の対応～精神疾患を抱えた利用者への対応力向上～」16名</p> <p>「キーパーソンが近くにいない利用者のケアマネジメント」（事例検討）12名</p> <p>ケアマネジメントの質の向上につながる内容で実施した。</p> <p>○事例検討会</p> <p>・こうめ事例検討会「キーパーソンが近くにいない利用者のケアマネジメント」12名</p> <p>参加者へのアンケート結果では、すべての参加者が今後の業務に活かせるとの回答だった。</p>		

4 介護予防支援・介護予防ケアマネジメント

6 年度の取組の視点	意思決定支援の視点から高齢者本人の意向を尊重するために、本人の強みを活かして、意欲向上を目指した目標を設定し、生活課題の解決を図る。 地域の高齢者と介護予防・自立支援の意識を共有するため、地域住民向けの研修を 2 回実施する。	
結果	プラン件数（自己作成） 1,428 件（前年度 1,318 件）	プラン件数（委託） 1,505 件（前年度 1,470 件）
<p>○令和 6 年度の自己作成のプラン件数は、令和 5 年度と比較して、70 件増加した。委託でのプラン件数は 18 件増加し、全体では 88 件の増加となった。ケアプラン作成においては、地域資源を活用したプランになるよう意識し、介護サービスと併用して地域の通いの場などのインフォーマルサービスへつながる。また、対応した事例について職員間で振り返りを行うために、月一回 1 時間程度、事業所内でグループスーパービジョンを実施して、本人の強みを活かした目標設定やアセスメント内容について意見交換を実施している。</p> <p>○地域住民向けに介護予防・自立支援をテーマにした研修会を 2 回実施した。15 名の地域住民が参加した。内容は、フレイル予防を目的に運動、社会参加、口腔ケアについて理学療法士、言語聴覚士が説明した。実施後のアンケートでは、73%の方が内容を理解できたと回答された。</p>		

5 認知症支援

6 年度の取組の視点	地域の住民に向けて、認知症の方を支えるために具体的な対応方法等の普及啓発を行い、地域の対応力向上を目指す。具体的な対応方法を記載した広報誌を 1 種類発行し、認知症普及啓発講座を地域住民向け 8 回、専門職向け 3 回実施する。	
結果	認知症サポーター数 254 人（前年度 263 人）	家族介護者教室 6 回（前年度 6 回）
<p>○認知症普及啓発事業</p> <p>地域住民に向けた将来の備えや認知症新薬などの講座等を 3 回開催した。のべ 25 名が参加され、実施後のアンケートでは、各講座が「十分理解できた」「理解できた」と約 96%の方が回答し、約 93%の参加者が「非常に良かった」「良かった」と満足度を示された。また、普段から交流のある保育園児を対象に「おじいちゃん・おばあちゃんを知る」時間等を設け、多世代に向けた認知症高齢者の理解を広げる働きかけを 9 回実施した。講座開催以外にも、広報誌を活用した認知症の人への正しい理解や対応方法、また認知症を「自分事」と考えていただけるよう、記事を掲載し普及啓発に努めた。認知症サポーター養成講座は、老人クラブ等の地域住民や地域の薬局、銀行、小学校児童等に幅広く実施し、昨年度同様の実績につなげることができた。</p> <p>○家族介護者教室</p> <p>家族の悩みや介護の課題を共有するピアカウンセリングを 6 回開催し、延べ 29 名が参加された。家族</p>		

	の介護負担軽減や孤立の防止等を図るとともに、気分転換等の機会となるよう支援した。ご本人が参加されることもあったため、途中分かれて話を進めるなど、お互いに有意義な機会となるよう配慮した。
--	--

6 地域ケア会議

6 年度の取組の視点	個別会議で抽出された地域課題を推進会議において、地域住民・地域の専門職と共に検討し、圏域別第 9 期地域包括ケア計画と連動させながら、具体的な取り組みにつなげていく。 地域ケア個別会議を 6 回、推進会議を 5 回実施する。	
結果	地域ケア個別会議 6 回（前年度 5 回）	地域ケア推進会議 4 回（前年度 3 回）
<p>○地域ケア個別会議</p> <p>2 か月に 1 回の頻度で定期的に実施。介護予防、重度化防止目的の定例会議と、困難事例課題解決のための臨時の会議と合わせて 6 回実施した。</p> <p>1 回の地域ケア個別会議では 1 ケースの事例を検討した。参加者は、54 事業所から延べ 65 名。医師会・歯科医師会・薬剤師会等の医療関係者と介護関係者が中心に参加し、事例は圏域の居宅介護支援事業所に協力を得た。</p> <p>事例検討から抽出した地域課題は、男性の社会参加の創出や高齢者の孤立の予防、情報発信の充実が多く見られ、第 9 期ごうめ圏域地域包括ケア計画を展開する際に反映していく。</p> <p>○地域ケア推進会議</p> <p>①第 9 期地域ケア計画の共有と実施に向けた検討</p> <p>計画実施において工夫する点やアイデアなどを検討する会議を 2 回実施。参加者計 46 名。</p> <p>②集いの場を通しての地域課題の抽出、解決方法の検討</p> <p>・自主グループ交流会 29 名参加</p> <p>地域住民主体の自主活動グループと、ごうめ圏域にて地域住民向けに介護予防活動をしている介護事業所等が情報・課題の共有、解決へつながるアイデアを検討した。各々の活動内容が可視化できたことで、お互いの活動に興味関心が高まり、新たな関係構築の一助となった。</p> <p>・カフェ運営検討会 9 名参加</p> <p>自主グループ活動継続に課題が生じたことから、参加者とともに解決策を検討した。会を通じて参加者各々の強みや思いが確認でき、その後は運営・活動を全員で取り組んでいくという良い変化が見られた。</p>		

7 生活支援体制整備事業

6 年度の取組の視点	共通の趣味や楽しみを通した集いの場を拡充し、地域住民が自主的に運営できるよう支援していく。 また、集いの場同士が連携し、地域の高齢者の交流が活性化することを目指す。 新たな集いの場を 2 か所設立する。	
結果	交流・通いの場 37 件（前年度 35 件）	
<p>○交流・通いの場の拡充</p> <p>総合相談や実態把握で聞き取った高齢者の趣味活動などの情報をもとに、共通の趣味や楽しみ</p>		

	<p>での通いの場を拡充してきた。令和6年度は新たな通いの場として、書道教室・ヨガ教室が介護事業所(ケアハウスこまち墨田館)にできた。当初、入居者のみの参加であったが、地域住民にも対象を拡大したことから、通いの場として登録した。さらに、サービス付き高齢者住宅(リリパワーレジデンスすみだ向島)と通所介護事業所(レコードブック向島)が共同にて2か月に1回、体操教室を開始。現在は入居者のみの対象ではあるが、ゆくゆくは地域住民の参加も検討している。</p> <p>その他、既存の通いの場の支援を通じ、通いの場の活動の幅を拡大した。</p> <p>園芸を趣味とした高齢者の通いの場では、すみだ福祉保健センターで年1回開催されているセンターまつりで、育てた花や野菜の苗を販売し、個人の趣味活動では難しい活動をグループで行うことで活動意欲の向上や交流の促進につながっている。</p> <p>○情報発信、関係機関の連携</p> <p>通いの場などのインフォーマルな社会資源について周知を図るため、日頃から地域の高齢者に接している専門職に向けて、地域情報をまとめたメールマガジンを毎週金曜日に延べ104回発行した。具体的な送信先は、任意団体「こうめつながるプロジェクト」に会員登録している58名に送信し、ケアマネジメントに活用していただくとともに、専門職から高齢者に情報提供していただいた。</p>
--	--

8 見守りネットワーク事業

6年度の取組の視点	圏域の高齢者を対象に実態把握を600件行う。実態把握においては、高齢者本人の強みに視点をあて、地域の活動につながるように働きかけを行い、住民同士のネットワークの構築を進める。	
結果	実態把握 621件（前年度 453件）	安否確認 7件（前年度 8件）
○実態把握調査は、課題だけでなく趣味活動等の、本人の強みを聞き取ることに重点をおいた。そして、強みに合わせた地域活動等の情報提供を行い、高齢者が地域の活動につながるよう働きかけを行った。実態把握の件数が計画を上回り、前年より多くの高齢者の状況を把握できた一方、安否確認の件数は前年とほぼ同様の水準を推移している。実態把握のなかで相談件数の多かった、入所施設に関する情報について、みんなの勉強会において取り上げ、情報提供を行うとともに、課題の共有および解決に向けた取組を実施した。		
○みまもりだよりの配布		
毎月みまもりだよりを発行 222か所 約3800部を配布 配布先：民生委員・町会・老人クラブ・見守り協力員・サロン・交番・医療機関・小学校・保育園・コンビニ・商店・新聞販売店・信用金庫・不動産業者・マンション・美容院・居宅支援事業所		
○民生委員交流会		
①7月開催 22名参加 第9期地域包括ケア計画について ②2月開催 14名参加 高齢者の消費者被害について		
○見守り協力員勉強会		
「すみだあんしんサポート事業について」 5名参加 講師：墨田区社会福祉協議会権利擁護センター		
○自主的な見守り活動の支援		

すみだ福祉保健センターで活動する健康体操教室や折り紙教室、墨老連地区会や伸成歩こう会において、ゆるやかなみまもりについての周知を行った。

○救急通報システムの設置 5 件（前年度 5 件）

○エアコン購入費助成事業（令和 6 年度のみ）

4～8 月 33 件の訪問調査を実施。設置条件を確認した。

○関係機関・地域との連携

・民生委員、自主グループ、民間業者、他みまもり相談室、支援センター、学校、その他地域の方々との打合せや話し合いの機会をもち、連携強化を図った。全 64 回

＜圏域別地域包括ケア計画の重点的な取組＞

※取組ごとに記載している目指すべき姿の数字は、以下に記載した高齢者福祉総合計画・第9期介護保険事業計画における5つの目指すべき姿を示しており、このいずれかにつながる内容として設定している。

- 1 … 必要に応じて生活支援サービスなどを利用しつつ社会参加して支え合っている
- 2 … 多様な介護サービスを必要に応じて利用している
- 3 … 切れ目のない円滑な医療・介護連携により必要な在宅療養を受けている
- 4 … 身体状況の変化と本人の希望に応じて住まい方を選択している
- 5 … 地域における認知症に対する理解が進み、認知症の人が安心してその人らしく暮らしている

取組名 地域の情報を皆さんに届けます		目指すべき姿：必要に応じて生活支援サービスなどを利用しつつ社会参加して支え合っている
背景となる現況・課題		8期計画では、人ととのさまざまなつながりを作るため、学びや趣味を通した地域での活動の機会を作ってきた。事業実施後のアンケート結果では各事業への参加者のうち約45%がチラシを見て参加したとの回答があった。その反面、事業が開催されていることを知らなかったとの声も聴かれており、情報が届いていない高齢者が存在していることが分かった。 令和4年度ニーズ調査の結果では、スマートフォン、タブレット、パソコン等のICT機器の保有率は80.3%となり、LINE等SNSの利用も44.6%となっている。 そこで、事業チラシだけでなく、さまざまな媒体を用いて地域の情報や生活に必要な情報を高齢者に届け、高齢者の社会的孤立の予防や解消に向けて、地域の取り組みが効果的に実施されるよう、その情報を高齢者に活用していただくことが必要である。
計画策定段階の前年度の事業実績		(計画期間の初年度のため令和6年度は記載なし)
第9期計画における目的		高齢者が地域の情報や生活に必要な情報を知ることができる。
令和6年度の取組の指標と方向性	目標	デジタル媒体等の活用や学びの場に参加することによる交流を通して高齢者やその家族、関係する専門職等に生活に必要な知識や地域の情報が届き、高齢者がその情報を活用することが促進される。
	投入資源	<p>○こうめつながるLINE LINE、パソコン、事業所ホームページ、運用開始のチラシ、担当職員（定期的な情報発信を行う）</p> <p>○こうめみんなの勉強会 講座会場（すみだ福祉保健センター等）・開催周知用チラシ・講座講師（地域の専門職、こうめ高齢者支援総合センター見守り相談室職員）・勉強会運営スタッフ（職員）・パソコン・プロジェクター・スクリーン・マイク・オンライン配信用機器（カメラ、パソコン、こうめYoutubeチャンネル）</p>

	<p>活動計画</p> <p>○こうめつながる LINE</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こうめつながる LINE の開設 ・こうめつながる LINE 運用規約の作成 ・こうめつながる LINE の地域（地域住民・専門職等）への周知 ・お友達登録、LINE アプリ登録の支援（個別対応、講座等） ・こうめつながる LINE での定期的な地域の情報発信 <p>○こうめみんなの勉強会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の専門職と連携し、定期的に対面での講座「こうめみんなの勉強会」を開催する。 ・こうめみんなの勉強会実施計画の作成、講師の依頼、勉強会開催の地域への広報、こうめみんなの勉強会の開催（7月、9月、11月、1月、3月 全5回）、勉強会の様子をオンライン配信（講師の希望により配信しない場合もある） ・開催後対面での参加者に向けてアンケートを実施し、希望する講座内容や講座の感想、参加のきっかけ、参加者間での交流、その他運営内容について確認する。
	<p>成 果 (アウトカム) を 測 る 指 標</p> <p>○こうめつながる LINE</p> <p>こうめつながる LINE の開設、こうめつながる LINE 運用規約（成果物）、LINE 活用のための講座の開催数、個別支援数、こうめつながる LINE 登録者数、こうめつながる LINE での地域情報の発信数</p> <p>○こうめみんなの勉強会</p> <p>勉強会の開催数、講座内容、勉強会への参加者数、連携した専門職（人数、属性）、参加者へのアンケート結果（希望する講座内容、感想、参加のきっかけ、参加者間の交流）</p>
実施結果	<p>活動の 実績 (アウト プット)</p> <p>○こうめみんなの勉強会 5回開催 現地参加者総人数 73名 ①「福祉用具体験」 参加者 6名 連携した専門職 5名（福祉用具業者 5社：福祉用具相談員） YouTube：当日配信のみ 内容：福祉用具の専門職から地域住民に、福祉用具の使い方やタイミング、福祉用具を利用した際の効果などを説明した。 アンケートより： ・年代 40代 1名 50代 1名 70代 1名 80代 2名 90代以上 1名 ・周知 「チラシを見て」83% 「人づてに」17% ・満足度 「大変満足」17% 「満足」50% 「普通」17% ・意見「実際に体験し、知識が習得できた」「ベッドに横になるなど、通常できない体験ができた」との感想あり。 ・福祉用具業者より「当日、福祉用具の相談につながった」 ・YouTube 視聴の感想 デイサービス：早稲田イーライフより「サービス提供中に利用者も一緒に見た。企画内容に興味関心が高かった。ほかの事業所でも案内する価値がある」「カメラアングル、音響に関して課題があった。」「YouTubeLive でほかの人が見ている状況を知りたかった。」 ②「老人ホームの選び方」 参加者 17名 連携した専門職 1名（相続診断士） YouTube：再生回数 62回（6/20現在）</p>

	<p>内容：セミナー講師（フォーカス会計事務所）が、老人ホームあんしんガイドブックを用いて、老人ホームの種類、特徴や入居前の注意点などを説明した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年代 40代1名 50代1名 60代2名 70代6名 80代7名 ・周知 「チラシを見て」76% 「人づてに」24% ・満足度 「大変満足」47% 「満足」41% 「普通」6% <p>③「みんなのオータムコンサート」 参加者 40名 連携した機関 5か所（デイサービス2 サ高住1 ケアハウス1 地域住民によるバンド1） YouTube 再生回数 82回（6/20現在）</p> <p>内容：地域の方々が、バンド生演奏の鑑賞および体操の機会を提供した。外出困難な方でもオンラインを通じて交流できる機会を設けた。</p> <p>④「元気に乗り切ろう！冬の感染症」 参加者 10名 連携した専門職 2名（看護師・理学療法士） YouTube 再生回数 42回（6/20現在）</p> <p>内容：訪問看護ステーション・リカバリーの看護師による講話。感染症の種類・感染経路・感染予防対策などを楽しく・わかりやすく伝えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年代 50代2名 70代2名 80代5名 90代以上1名 ・周知 「チラシを見て」70% 「人づてに」20% ・満足度 「大変満足」40% 「満足」60% <p>⑤「終活について」 参加者 17名 連携した専門職 2名（家族信託コンサルタント、老人ホーム紹介センター） YouTube 再生回数 24回（6/20現在）</p> <p>内容：トリニティ・テクノロジー株式会社の方が講師となり、家族信託や身寄りのない方の生前対策などの「終活」について、わかりやすく説明した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年代 60代1名 70代6名 80代6名 90代以上1名（アンケート回収14名） ・周知 「チラシを見て」64.3% 「人づてに」35.7% ・満足度 「大変満足」14.3% 「満足」42.9% 「普通」21.4% 「やや物足りない」7.1% 「未回答」2名 <p>・会場にて家族信託について、2名からより具体的な質問あり。身元保証、成年後見について3名から実際的な手続き等の質問が寄せられた。</p> <p>★デジタル媒体等の活用について</p> <p>すべての開催において、1つのデイサービス事業所のみが配信を見ていた。コンサートは、別のデイサービス、ケアハウス、サ高住が参加した。個人やその他機関の参加なし。</p>
<p>成 果 （成 果 指 標 を 用 い た 目 標 の 達</p>	<p>①福祉用具体験 ○福祉用具への「知識・理解の深化」と「活用の具体化」 ・専門的な知見を持つ複数の福祉用具業者との直接的な交流機会を持つことで、参加者がより信頼性の高い情報を得ることができた。多様な福祉用具の知識を得て、実際に体験することで、導入へのイメージと活用の意欲を高めることができた。</p>

成 状 況)	<p>○地域における「福祉用具活用の促進」と「専門機関との連携強化」 •地域における福祉用具活用につながる情報提供の向上につながり、今後の専門機関との連携の強化するうえでの重要な足がかりとなった。</p> <p>② 老人ホームの選び方</p> <p>○知識の獲得、不安の軽減</p> <p>老人ホームの種類や選び方、準備についての理解が深まり、「選択肢がある安心感」を持て、不安が軽減された。</p> <p>○行動の変化</p> <p>当日の参加者は 17 名だが、配信再生回数は 60 回（6/20 現在）と全 5 回のなかで 2 番目に多い。アンケート結果から、自分や家族の将来に向けて、必要な知識を求めていることが分かった。様々な種類の施設があることが分かってよかったですとの感想があり、目的を果たせている。また、今後も学びたい、もっと詳しく知りたいと、今後の人生を前向きに考える機会となった。</p> <p>③みんなのオータムコンサート</p> <p>参加者が他の会と比較して 2 ~ 3 倍の参加者数である。バンドメンバーの関係者や応援する方などを含み、歌唱者、演奏者、参加者が一体となって歌を楽しむ交流の場となっている。再生回数も 80 回（6/20 現在）で一番多い。コンサートへの参加によって、楽しんだ感想を言い合い、記念写真を撮るなどの交流の場が増えた。</p> <p>④元気に乗り切ろう！冬の感染症</p> <p>○感染症予防の知識習得と健康管理への意識向上</p> <ul style="list-style-type: none"> •初めに体操をすることで、緊張感がほぐれて場が和み、交流が生まれた。 •講義中に参加者全員で手をこするなどの実演をすることでより理解が深まり、参加者同士の会話が生まれた。 •「お友達ができるようにしてほしい」との意見により、交流機会のニーズがあることが分かる。 •資料が見づらい、声が聞こえづらいとの意見から情報提供のユニバーサルデザインに関する意見が得られた。 <p>⑤終活について</p> <p>○終活知識の深化と行動意欲の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> •終活の具体的な知識や情報を得て理解を深め、自身の将来への準備や家族との話し合いといった行動への意欲を示した。「準備することの重要性」を認識し精神的な安心感を得た。 •特に家族信託や生前対策といった具体的な内容について、知らなかった知識や情報を得て理解を深めることができた。 •参加者の半数以上から肯定的な評価を得ており、終活に関する情報への一定のニーズを満たした。 <p>★デジタル媒体等の活用について</p>
-----------	---

	<p>・YouTube 配信について、サービス事業所へ周知するなど PR に取り組む必要がある。現地に赴くことなく、参加できるメリットを伝えていく。</p>
備考	楽しみがあることは外出する動機づけになる。歌唱とコラボした講座にしたら参加者が増えるかもしれない。

取組名 一歩踏み出し、皆と交流を深めよう		目指すべき姿：必要に応じて生活支援サービスなどを利用しつつ社会参加して支え合っている
背景となる現況・課題		<p>令和 4 年度ニーズ調査の結果外出を控えていると回答した高齢者は令和元年度と比較して 10.6% 増加している。外出を控えている理由は、「足腰などの痛み」がこうめ地区を含め、すべての地区で最多となっている。</p> <p>8 期計画で実施してきたウォーキンググループの立ち上げや誰でも休めるベンチの設置の結果、圏域内で 4 団体のウォーキンググループが設立され継続的に実施されている。また、ベンチの設置個所は 15ヶ所となり、地域に気軽に休める場所が増加した。ベンチ設置協力者へのモニタリングでは地域の高齢者が休憩するためにベンチが使用されていることが分かった。</p> <p>高齢者の外出がさらに気軽になるために、8 期での取り組みを拡大していくとともに、高齢者の心身機能の向上を促す取り組みが必要となる。</p>
計画策定段階の前年度の事業実績		(計画期間の初年度のため令和 6 年度は記載なし)
第 9 期計画における目的	高齢者が地域の活動の場に行くことができるよう、心身機能を維持・向上することができる。	地域の環境が整い、高齢者が安心して外出できる。
令和 6 年度の取組の指標と方向性	目標	高齢者が心身機能を維持・向上する意識づけにつながる
	投入資源	<p>○地域での体力測定会</p> <p>体力測定会場（押上三丁目伸成町会会館、小梅一丁目町会会館、須崎会館、すみだ福祉保健センター）、測定機器（握力計、ストップウォッチ、メジャー等）、運営ボランティア（地域住民）3 名、地域リハビリテーション活動支援事業（療法士 2 名）、こうめ職員、チラシ、測定結果シート、プリンター</p> <p>○ウォーキングマップを活用した介護予防</p> <p>ウォーキングマップ（1500 部）、作成スタッフ（こうめ職員）、地域住民（地域の情報提供）、ウォーキングイベントチラシ、ウ</p>

	オーキングイベント運営者（地域リハビリテーション活動支援事業療法士、こうめ職員、ボランティア等）、ウォーキンググループチラシ	
活動計画	<p>○地域での体力測定会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・半年ごとの体力測定会を圏域内4ヶ所で実施する。 ・すでに体力測定会を実施している会場（押上三丁目伸成町会、すみだ福祉保健センター）での実施を継続する。 ・ウォーキングマップの作成やウォーキングイベントの開催に合わせて、同地域の町会会館を舞台に体力測定会を実施することの提案を地域住民に行う。その際に、地域住民が運営者として参加できるよう促す。 ・体力測定実施のチラシの作成、地域住民への広報を行う。 ・体力測定運営スタッフ養成のための講習会の開催 ・新会場（須崎会館（向島五丁目西町会）、小梅一丁目町会会館）での体力測定会実施。 ・実施結果は、アンケート結果とともに集計し、次回以降のデータと比較できるようにする。 <p>○ウォーキングマップを活用した介護予防</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たに1地域（小梅一丁目町会を想定）でウォーキングマップを作成する。作成に当たっては、地域住民と地域の課題や魅力を話し合う地域ケア会議を開催し、マップに掲載する内容を決める。 ・完成後は、1500部マップを印刷し、地域住民に配布。また、マップを活用したウォーキングイベントやウォーキンググループの立ち上げを行う。 	<p>○こうめイスプロジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰でも座れるベンチを新たに圏域内にベンチを3か所設置するため、ベンチについての広報を地域住民、関係機関向けに行う。 ・設置協力者を募集し、ベンチを設置する。設置した際には、新たにベンチを設置したことを地域に広報し、周知を図る。 ・ベンチ設置者への定期的なモニタリングを実施し、補修等が必要な場合は対応する。また、ベンチの利用状況について把握する。
成果（アウトカム）を	<p>○地域での体力測定会</p> <p>体力測定会開催数、開催場所数、参加者人数、測定結果（アンケート結果</p>	<p>○こうめイスプロジェクト</p> <p>ベンチ設置数、ベンチ設置場所、ベンチ設置者へのモニタリング（活用状況、ベン</p>

	<p>測る指標</p> <p>含む) 複数回参加した人数、運営スタッフとして参加した地域住民の人数</p> <p>○ウォーキングマップを活用した介護予防</p> <p>マップ作成数・発行数、マップ作成地域、マップ作成時に開催した地域ケア会議数、抽出された地域の課題・魅力、ウォーキングイベント参加者数、ウォーキンググループ設立数、ウォーキンググループ参加者数</p>	<p>チを通した交流の状況等)、</p>
実施結果	<p>活動の実績 (アウトプット)</p> <p>○体力測定会 全4回実施 34名参加 ①5名参加 すみだ福祉保健センター（悪天候により、当日キャンセルが2名） ②11名参加 押上三丁目伸成町会 ③8名参加 小梅一丁目町会 ④10名参加 すみだ福祉保健センター</p>	<p>○こうめ圏域のベンチ設置数 19か所 うち、令和6年度設置 2か所 こうめ圏域外のベンチ設置数 3か所 うち、令和6年度設置 1か所 ○モニタリングを実施</p>

成 果 (成 果 指 標 を 用 い た 目 標 の 達 成 状 況)	<p>【全開催を通じてのアンケート結果より】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自身の健康状態への「気づき」と「自己理解の促進」 <p>アンケート結果より：「大変良かった」「良かった」の回答が合計で 100%であり、参加者全員が何らかのポジティブな評価をしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自分のことがわかってよかったです」「自分の体力が分かった」といった意見が多数ある。 ・参加者は、参加を通じて現在の健康状態を客観的に認識し、自己理解を深めることができた。 <ul style="list-style-type: none"> ○健康行動への「意欲向上」と「前向きな行動変容のきっかけ」 <p>アンケート結果より：「自分の体力が分かって、これからの力になった」という回答や 70%が「思った以上に良い結果だった」と回答していることから、今後の行動へのポジティブな動機付けが生まれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康維持、増進に向けた具体的な行動を起こすための前向きな意欲を高めるきっかけとなった。 <ul style="list-style-type: none"> ○体力測定会への「高い満足度」「運営への信頼感」 <p>アンケートより：全員が「大変良かった」または「良かった」と回答し、「みなさん親切で良かった」という意見があった。参加者は体力測定会に高い満足度を示し、運営側への信頼感も醸成された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○参加者の継続的な健康意識の向上と、今後の健康行動への強い意欲の醸成 <p>アンケートより：「半年後にこのイベントがあるなら参加するか？」との問い合わせに 100%が「参加する」と回答したことは、体力測定会が自身の健康への気づきと理解を深め、さらには健康維持・増進に向けた具体的な行動を継続していくための、動機づけになっていることを示している。</p>	<p>【モニタリング結果より（5か所から回答あり）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○高齢者の外出促進と生活の質の向上 ・「犬の散歩の途中や、病院の行きかえりの休憩場所になっている」「金魚鉢があり、子供に人気」「金魚やお花をゆっくり座ってくつろぎながら見ることができる。ほっとできる。」「ケアハウス居住者が使用できるのでありがたい」といった意見あり。 ・イスが置かれていることによって、高齢者やケアハウス居住者が気軽に外出できる機会を増やし、日々の生活における休憩や癒しの場を提供することで、身体的・精神的な負担を軽減し、生活の質の向上に貢献している。 <ul style="list-style-type: none"> ○地域住民間の交流促進とコミュニティ意識の醸成および安全・見守り機能の強化 ・「小学生が進んで挨拶するようになった」「イスがあることで交流ができる。」との意見から、イスを介して、小学生や高齢者が交流する機会ができていると分かる。 ・異なる世代（特に小学生と高齢者）や地域住民が自然に集まり、挨拶をかわし、会話するきっかけになることで、地域内の交流を促進し、コミュニティ意識の醸成に大きく寄与している。 ・「地域の方に、デイがあることの周知につながっている」との意見から、介護施設の存在を地域に周知する効果をもたらしたと分かる。 ・「小学生の下校時刻の見守りの拠点となる」との意見からわかるように、地域の安全機能と見守り体制の強化に貢献した。 <ul style="list-style-type: none"> ○地域住民のニーズ充足と満足度向上 「金魚鉢があり、子供に人気」 「金魚やお花をゆっくり座ってくつろぎながら見ことができる」「イスを増やしてほしい」との要望がある。 ・上記から、イスを置くことの効果を実感したうえで、「増やしてほしい」と、社会資源への興味が高まっている。イスの設置は、地域住民（特に子供連れを含む）の休憩やいやし、交流へのニーズを明確に満たし、高い満足感をもたらした。 ・さらに「増やしてほしい」という要望から、地域住民
--	--	---

		がその効果を実感し、地域資源や地域づくり活動への関心と理解を深めるという、今後の地域貢献につながる効果もあった。
備考	R5年度に伸成町会でウォーキングマップを作成し、歩こう会が始動しはじめたところで、体力測定会を実施。開催には、町会長からの強い働きかけがあった。	モニタリングにより、補修が必要なイスがあると分かった。

取組名 地域の担い手創造		目指すべき姿：必要に応じて生活支援サービスなどを利用しつつ社会参加して支え合っている
背景となる現況・課題		<p>高齢者が活動するための通いの場には、活動の担い手が必要となる。現在、さまざまな人が担い手として通いの場を運営している。地域の高齢者が通いの場などの地域の活動に参加しやすくなるためには、身近な場所に活動の拠点がさらに増え、高齢者が長距離を移動しなくても気軽に参加できるようになることが必要である。そのためにもさらに多くの担い手が必要となる。</p> <p>令和4年度のニーズ調査において、地域づくりに世話役としての参加意向は、「ぜひ参加したい」「参加してもよい」の回答を合わせると30.5%となり、他の地域と比較してこめ地域は最多であった。地域には潜在的な担い手の方が多く存在している。</p> <p>地域の潜在的な担い手が、地域活動を始めるきっかけを作る必要がある。また、自主グループ交流会では、担い手の高齢化などの課題も挙げられている。担い手を増やすためには、高齢者に限らず、地域の多様な人材に協力を求める必要がある。</p>
計画策定段階の前年度の事業実績		(計画期間の初年度のため令和6年度は記載なし)
第9期計画における目的		高齢者を支える地域の担い手を増やす。
令和6年度の取組の指標と方向性	目標	高齢者や地域住民が、地域の担い手として活動する知識を得ることができ、さまざまな通いの場で活動・参加することで担い手となるきっかけを得ることができる。
	投 入 資 源	<p>○地域の担い手創造研修 こめ職員（研修内容の企画）、研修資料、講師（地域の専門職、地域リハビリテーション活動支援事業療法士）、チラシ、区報への掲載</p> <p>○多世代がかかわることのできる通いの場・活動の場をつくる こめ職員（通いの場の企画）、運営者募集のチラシ、地域ケア会議（通いの場設立のための会議）、通いの場チラシ</p> <p>○食を通した通いの場の開設 こめ職員（通いの場の企画）、飲食店、飲食店スタッフ、チラシ、管理栄養士、通いの場運営ボランティア</p>
	活 動 計 画	○地域の担い手創造研修 全4日間程度の研修を企画する。地域の通いの場等の運営者として活躍するために必要な

	<p>知識を学べる場として、必要なカリキュラム内容に沿った研修資料や講師の選定、会場の確保、実習先の確保を行う。令和 7 年度からの研修実施に向けて、チラシを作成し、区報への参加者募集記事を掲載する。</p> <p>○多世代がかかわることのできる通いの場・活動の場をつくる</p> <p>多世代が関わることのできる通いの場として、「ゴミ拾いウォーキング」「多世代の知恵の交換の場」等を企画する。運営者として地域住民も参加できるよう、運営者の募集を行い、一緒に設立に向けて検討をしていく（地域ケア会議の開催）。検討した内容で、通いの場を設立し、イベントを年度内に 1 回実施する。</p> <p>○食を通した通いの場の開設</p> <p>飲食店等を会場にして食を通した通いの場を企画し、企画内容を地域の飲食店に説明し、協力を求めていく。協力に同意した飲食店等のスタッフとともに、設立に向けて準備を行う。開設にあたっては、チラシを作成し、地域住民に周知（区報、こうめつながる LINE 等を活用）を行う。</p>
	<p>成 果 (アウトカム) を 測 る 指 標</p> <p>○地域の担い手創造研修</p> <p>研修企画書、研修資料、連携した講師人数、実習先の通いの場数、周知用チラシ発行数</p> <p>○多世代がかかわることのできる通いの場・活動の場をつくる</p> <p>多世代がかかわる通いの場の企画書、イベント開催数、運営スタッフとしての協力者数、通いの場の設立数、通いの場の内容、高齢者以外の参加者数、多世代交流の状況</p> <p>○食を通した通いの場の開設</p> <p>食を通した通いの場の企画（飲食店等を会場にして、飲食を伴う通いの場）、地域の飲食店等への企画説明数、協力に同意した関係機関（飲食店等）、食を通した通いの場の設立数、集いの場実施回数、通いの場の広報のためのチラシ配布数（デジタルや区報等での周知についても実施する予定であり広報手段の種類も併せて確認する）、運営者として協力した地域住民や飲食店スタッフ等の人数、通いの場参加者数</p>
実 施 結 果	<p>活 動 の 実 績 (アウト プット)</p> <p>○食を通した通いの場の開設</p> <p>① すみだ福祉保健センター 2 名参加 食事提供：シルバープラザ梅若</p> <p>② ケアハウス こまち墨田館 6 名参加 食事提供：シルバープラザ梅若</p> <p>③ すみだ福祉保健センター 0 名</p> <p>○社会資源の周知、施設と地域との交流</p> <p>ケアハウスこまち墨田館 施設見学 5 名</p> <p>○担い手創造</p> <p>研修の準備や関係者との調整等</p>
	<p>成 果 (成 果 指 標 を 用 い た 目 標 の 達 成 状 況)</p> <p>○食を通した通いの場</p> <p>①参加者の意見</p> <p>「こんな機会が欲しかった」「コロナ以降、集まって食事をすることがなかったのでうれしい」「継続して来たい」との意見から、高い関心と継続参加の意向が確認できた。</p> <p>②社会資源としての施設</p> <p>施設見学会としての意味を果たした。地域住民にとって、施設を知る機会となった。</p> <p>施設入居者との交流機会となった。地域住民の交流の場となった。</p>

	<p>○地域の担い手</p> <p>・ケアハウスこまち墨田館は、地域住民に施設を開放し、居住者と地域住民、施設と地域が食事を通して交流する場として、今後も場所の提供を希望している。集いの場を提供する担い手となった</p> <p>・こまち墨田館での食事会の広報は、民生委員が主に担っている。そのほか、伸成歩こう会の仲間同士が誘い合って参加するなど、参加者が広報の担い手となっている。</p> <p>○課題</p> <p>すみだ福祉保健センターでの開催は、初回2名、3回目は参加者が集まらず中止となった。こまち墨田館とは会場の条件が異なり、企画の告知方法や広報期間について、より効果的なアプローチを検討する必要があるという学びが得られた。包括・みまもり職員からの呼びかけが主であったが、チラシ配布場所や呼びかけの機会を増やすなど工夫していく必要がある。</p>
備考	<p>・ケアハウスこまち墨田館は、以前から「食」を通したつながりづくりに力を入れており、このような機会は事業所の方針にマッチしていた。</p>